

人理を背負う植物妖怪

ゴミ君

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

廃墟と化した燃える街の中、反転した騎士王を打倒するために英霊召喚を行った藤丸立夏。

顕れたのは、状況に似つかわしくない清々しい香りを纏う、緑色の少女だった。

「召喚に応じ参上しました。貴方が私のもって熱?!?火?!?火の海の中?!?」

なお、くさタイプはほのおによわい。

※当作品は、東方projectの二次創作フリーゲーム、東方自然癒の二次創作にあたります。東方自然癒のネタバレを含みます。

http://tohosizenyuu.izayoi.net

目次

ステータス：キャスター	1
序節く植物と盾と火術使いく	
召喚までの成り行き	8
やけど	15
手際	19
しんがり	26
眩い金木犀	30

ステータス：キヤスター

真名 瀬笈葉 クラス キヤスター 身長 138cm (帽子を除く) 体重 34kg 出典 東方求聞史記(東方自然癒)
好きなもの 人・植物・故郷 嫌いなもの 好きなものを傷つけられる事 属性 秩序・善 地域 幻想郷
極東の奥地に秘されし幻想郷の住人。植物の妖怪(自己申告)。
役目と共にその生涯を終えた後、燃え盛る特異点・Fにて召喚された。

幻想郷中の植物が衰弱していった植物異変のキーパーソン。生まれながらに無情な運命を定められ、それと関係無く数多くの不幸に見舞われた薄幸体質の持ち主。

外見は緑色の大きな帽子が印象的な、深緑の服を着た眼も髪も緑色の少女。帽子は諸事情により脱ぎたくない。

知名度は幻想郷の住民の中でも低め。本来であれば、日本で召喚されてやっと型落ち程度だが、地球上のあらゆる植物が彼女という存在を知っている事で、植生のある土地ならば差し引きで普通ぐらいの知名度補正を得られる植物からの知名度補正など普通は得られないが、後述する植物会話スキルの影響で恩恵を得られている。

キヤスターの他にアーチャー、バーサーカーの適性を持っている。キヤスターの場合治癒能力に特化しており、他クラスでの現界より治癒に関わるスキル・宝具のランクが高くなっている。

性格は穏やかかつ善良で、物腰は柔らかく誰に対しても丁寧。よほど酷い扱いや命令をしなければマスターに従う真面目気質の持ち主。他クラスに比べて救助精神が高い。目に入る全てを救おうとして、結果的に身を滅ぼすタイプ。手綱はしっかりと握る事。

献身的な精神から人理修復にはかなり協力的。混沌・悪の側面を持っているが、そちらで召喚されなくてホッとしている。

【ステータス】

マスター 筋力 耐久 敏捷 魔力 幸運 宝具 藤丸立夏
C D++ B A+ D EX

キャスターのクラス特性上耐久値が低いですが、後述するスキルにより、特定の状況でのみ際限無く自己再生する。俗に言うゾンビ盾が出来なくもない。

かなり幸薄な境遇だが、己の不運を嘆いたのは、その生涯においてただ一度だけだった。

【クラススキル】

魔力生成（光合成）：A+

魔力を生成する能力。光合成の要領で太陽光を魔力に変換する。異種の魔の派生スキル。

生成された魔力は単独での行動や現界の維持に利用出来るが、一定時間消費されないと霧散する。なので、夜間の活動の補助は難しい。変換効率が極めて高く、宝具のような魔力消費が激しい行動を除き、日中は魔力供給を必要としない。

（フィールドが〈日中〉の時、自身に毎ターンNP獲得状態を付与）

契約符作成：C

魔術的な道具を作成する技能。

必要な材料が揃っていれば『スペルカード』を作成出来る。

スペルカードは所有者以外でも使用出来るが、減衰が起きたり暴走して制御が効かなくなったりと得は無い。

（自身のQuickカードの性能をアップ&Artsカードの性能をアップ&Busterカードの性能をアップ&与回復量をアップ）

陣地作成：B

魔術師として、味方に有利な陣地を作り上げる。

十分な時間をかけ、体力、魔力を消費することで結界宝具“真・深緑結界”を展開出来る。

完璧な結界の作成には相当な消耗を必要とし、彼女本人は結界の影響を受けられない。

(自身を除く味方の Artsカードの性能をアップ)

【保有スキル】

異種の魔(植物)：EX

人外の異能を表すスキル。鬼種の魔とは規格が異なり、有する性質によって取得する能力も変化する。

彼女の場合、植物の性質を有している。幻想郷の植生の全ての性質を持つ彼女は、当然ながら規格外である。

魔力生成(光合成)、植物会話言葉を持たない植物との意思疎通が出来る。意思だけでなく感覚も汲み取れるが、不快感等も共感してしまう。根下ろし陣地での回復速度を速める。栄養のある土に素足を付けることで短時間で損傷を回復出来る。毒生成毒素を生成する。植物由来、被可燃よく燃える。このスキルは外せない。等の混合スキルを持つ。

(NPを増やす&フィールドが〈大地〉の時、毎ターンHP回復状態を付与「Lv」(3ターン)&延焼を付与×5(解除不可)&フィールドが〈炎上〉の時、やけどを付与(5ターン)【アメリカット】)

戦闘続行：B―

往生際が悪い。

終わりたくないと思う限り、現界を維持し続けられる。致命傷を負っている間は動けなくなる。

(自身にガッツ状態(1ターン)を付与「Lv」)

心眼(偽)：D++++

直感・第六感による危険回避。

近距離戦闘では相手が一流だと長持ちしない程度だが、遠距離戦闘においては神がかった危機察知能力を持つ。

初見の攻撃でも最適な対処法を見抜き、それを実行出来るが、狙撃手を視認出来ない場合、判定にマイナス補正がかかる。ゲームでは使用しない。

魔力放出（飛行）：B――

自身の肉体に魔力を帯びさせ、放出する事によって空を飛べるスキル。

本来なら空を自由に飛び回れる高い機動力を持つが、移動速度が早歩き程度に低下している。

空気に混じる魔力が濃密な幻想郷で使われている技術を、魔力が希薄な近代で使っているのので、推進力に支障が出ていると思われる。

ゲームでは使用しない。

治癒：A+

傷を癒す魔術。

欠損未満の損傷、精神異常を除く不調を即座に回復出来る。

『スペルカード』を用いると効果が強くなる。

（味方単体の弱体状態を解除&HPを大回復「Lv」）

背負う者：――

植物を救った名残。

異変という人為的な異常気候により、幻想郷の植物に蓄積していった”毒”をその身に背負い、無毒化していく機能。

植物の魂ごと背負い、その数に応じて力が増していくが、浄化し切れなかった毒に身を蝕まれ、徐々に壊れていく。

人理修復においては、活用の際は無いと思われる。ゲームではクラススキルとして扱われる。

（毒・蝕毒を無効化する）

【宝具】

見様見真似リの若草色魔砲ス

ランク：C+

種別：対軍宝具

レンジ：50

最大捕捉：50

極太の魔力砲。

師匠の得意技を見せてもらった時に、憧れ半分で構えたら見かけだけ再現出来てしまったという曰く付きな技。

本家は、ミニ八卦炉という特製の火炉に呪文をかけて放つ破壊に特化した魔術だが、彼女のそれはただ魔力を砲に見立てて放出しているだけなので、ランクは本物に比べて数段落ちる。

真名開放にはスペルカードの宣告が必須である。

太極図を装備するとランクが上がり、魔力消費が抑えられる。ゲームでは使用しない。

スウィートブラッドキユアイルネス
我が血は甘露、我が血は神薬

ランク：EX

種別：対毒宝具

レンジ：—

最大捕捉：1（120mlの容器に入れてある場合）

彼女の体に流れる血。

幻想郷の全ての植物の成分を持ち、飲んだ対象にとって最も適切な効果を発揮するチート水薬。

例として、風邪を引いていれば解熱作用を、食中毒にかかっていたらば解毒作用を働かせる。病毒に侵されていなくても、単純な回復薬として使える。

狂化を除く精神異常を確実に治癒し、判定に成功すれば、狂化すら一時的に解除出来る。植物異変と同時に起きた狂化異変の解決策として、彼女の血が用いられたことに由来する。

甘くて美味しい。その味は吸血鬼のお墨付き。吸血能力を持つ生き物を強く惹きつける。

「血つて言っても樹液、そう蜜！蜜と同じですよ！不衛生とか、飲んだら何かあるとかないですからっ！」

ゲームでは使用しない。

真・深緑結界

ランク：B

種別：結界宝具

レンジ：20

最大捕捉：4

姉から継承した結界術。

結界内の味方を守護し、士気を高め、心身を癒す。宝具未満の攻撃を完全に遮断するが、強力な攻撃を受け続けると許容量を超えて割れてしまう。

展開に己を構成する魔力の大部分を消費する。戦闘続行で辛うじて首の皮一枚は繋がるが、魔力供給を受けないと動けなくなってしまう。

（自身を除く味方全体の攻撃力をアップ（3ターン）&防御力をアップ「Lv」（3ターン）&クリティカル威力をアップ「Lv」（3ターン）&毎ターンHP回復状態を付与へオーバーチャージで効果アップ）&毎ターンNP獲得状態を付与&弱体状態を解除+自身に即死効果【アメリカット】）

【Weapon】

太極図

彼女の師匠曰く、模様をついた石ところ。

師匠の伝手で作ってもらった彼女専用の二代目ミニ八卦炉。本家ミニ八卦炉のような増幅ではなく、無駄な力を出さないように適度に抑える機能を持つ。

中国の宝具とは一切の関連性は無い。名前を借りただけ。

植魂　く華紗紋扇く

名を捨てた神様に作ってもらった扇。植物の力が宿っている。植
物妖怪の彼女とは親和性が高い。　　植

序節く植物と盾と火術使いく 召喚までの成り行き

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公」

7月某日。藤丸立香はせつかくの夏休みに、空襲に遭ったかのように火の海に飲み込まれ、廃墟と化した街の中で、メモ書きされた中学生の頃なら超カッコよく感じていたような呪文を唱えていた。

お前はそんなところで何をしているんだ。もし誰かにそう聞かれたとしても、彼は答えられないだろう。

どうして、こうなったのか。

彼は助けを強く求めながら、余りにも濃い今日という日を回想した。

俺はついさつきまで、何かの適性を見出されて、極寒の地に建てられた何かの施設、カルデアにいたはずだった。

難解な話について眠ってしまった結果、偉い人に怒られて出て行けと怒鳴られてしまい、自分に割り当てられた部屋でサボってた人、通称ロマンと雑談をしていたら、前触れなく白い部屋が耳をつんざくような警報音と共に赤い光に包まれた。

ロマンによるとさつきまで自分がいた部屋で何かがあったようで、自分を先輩呼びするよく分かんない女の子を助けに向かったら、いつの間にか件の空襲にでもあったかのような街——特異点・F——に突っ立っていたのだ。

そこからも物凄い勢いで事が進んでいった。

まず、飛び散る火の粉にビクビクしながら人を探していたら、武器を持ったガイコツに襲われた。明らかに危険な風貌を見て即座に逃げ出そうとしたが、頭がパニックになっていたせいですっ転び、あわや命を落とすというところで、ガレキに押し潰されて動けなかったはずの先輩呼び女の子、マシユが助けてくれたのだ。：目のやり場に困るコス

ブレに変身して。マシユは身体のラインが出ている衣装に恥じらうこともせず、手に持っていた大きな盾を振り抜きガイコツを砕いた。腰が抜けて座り込んでいるのを助け起こしてくれたマシユが言うには、死ぬ寸前のところでサーヴァントという凄い人が融合して命を救ってくれたそうだが、理解出来なかったのでいい人がいてよかったということでした。

カルデアと通信をするためにパワースポットを探さないといけないらしく、それに着いていたら女性の高い悲鳴が聞こえてきた。何事かと思つて声の方向へ急ぐと、そこには自分に説教をしていた偉い人、オルガマリー・アナムスフィア所長がガイコツに群がられてガチ泣きしながら逃げ回るといふ光景があった。

俺もマシユも慌てて所長を助けたら（俺は見てるだけだったけど）、所長の足元にパワースポットがあったようで、カルデアと通信を繋げて、所長が生き残っていたロマンと色々と話していた。

カルデアに帰るためには、この特異点・Fのどこかにある聖杯というとても貴重なアイテムを回収しないといけないと伝えられ、それを探そうとした矢先、シルエツトのように真っ黒な禍々しい不審者――シャドウサーヴァント――が不意打ち気味に襲ってきた。

マシユはサーヴァントさんと融合した影響で、身体能力が馬鹿みたいに高くなっていたが、鎖付きの杭を構えた長身の女性：に見える影は、それをあざ笑うかのようにマシユを翻弄した。徐々に疲弊していったマシユが危うく深い傷を負いそうになったその時、炎の弾が女性の影の攻撃に割り込んだ。

炎の弾を撃つたのは、これまたコスプレめいた兄貴肌な高身長のお男だった。その男は呪文に使うような木の杖を構えて女性の影めがけて疾走し、なんと杖で女性の影の腹に刺突を繰り返した。

クリーンヒットに怯んだ隙に、追い打ちの炎の弾や杖術でノックアウトされた女性の影が光の粒に飲まれて消えていくのを尻目に、男を警戒するマシユに、その男は自分はクーフリーンだと名乗り、敵対するどころか協力を持ちかけた。

聖杯を持っているのは、なんとあのアーサー王で、しかも閻墮ちし

てしまったらしい。ランサーならまだしも、キャスターの姿では単体でアーサー王に勝つのは難しいと考えたクーフリーンは、理性が残っている協力出来そうな相手を探してあちこちをうろついていたそう
だ。

ちなみに、ランサーとかキャスターというのは、サーヴァントなら必ず持つ「クラス」というもので、要はクラスによって得意なことが違っていてことだと言っていた。そうなんだと思っていると、マスターなのにそんな事も知らないのかよと少し呆れられたが、それなら他にも色々教えてくれた。

サーヴァントには、「宝具」という、簡単に言ったら専用の必殺技があると言われた。クーフリーンは、巨大な藁人形に閉じ込めて焼き尽くす技を持っているそうで、疑似的にはいえサーヴァントになったマシユも宝具が使えるはずらしいが、マシユは何故か使えないですと申し訳なさそうに言った。クーフリーン曰く、力の使い方を知らないでいきなり力を得たせいで、力が詰まっているそうだ。どうすればいいかと尋ねたら、手っ取り早い解決の手段があると言って、いきなり襲い掛かってきた。

宝具まで使ってマシユを本気にさせようとした甲斐あって、マシユは何とか宝具を使えるようになった。これで戦力に数えられるようになったらと、俺たちはいよいよアーサー王を打倒しに向かうことになった。

その道を阻んだ双剣を巧みに使いこなすアーチャー(?)のシャドウサーヴァントを倒したところで、クーフリーンがおもむろに口を開いた。

「このままじゃ、無理だ」

いきなりのギブアップ宣言に、情緒が不安定気味な所長はキレた。今のアーチャーも強敵だったけど倒せたんだから、アーサー王もきつと倒せるはずだ、と。その反論に対して、クーフリーンは冷静に返した。

「確かにアイツも強かったが、あくまでシャドウサーヴァントだ。能力が本来より低い上に、宝具も使えねえ状態だ。あくまで残滓だから

な。俺たちはそんな相手は、本当なら楽勝で倒さなきゃならねえ。なのに苦戦してる有様じゃ、騎士王サマにやあつという間にやられちゃうだろうよ」

アイツは格が違うからな。真剣な顔で告げられたその言葉に、俺たちはうつむいて沈黙した。命がけで宝具を習得したのに、それも無駄な努力だと暗に言われたように感じたからだ。そんな俺たちに対して、クーフリーンは、ニヤリと笑みを向けた。人を絶望させておいて、何を笑ってるんだと怒りたくなつたが、その前にクーフリーンがこう言った。

「早とちりすんなよ。このままじゃ無理だ」って言ったんだ。

「……あるだろ？即戦力を得られる手段が一つ」

その手段というのにピンと来なかつたのは俺だけだったようで、他の面子はハツと顔を上げ、揃って声を上げた。

「英霊召喚ね（ですね）！」

それは正解だったらしく、クーフリーンが満足そうな笑みを浮かべる。でも、召喚をするための触媒が無いと所長が言ったが、そこは大丈夫だとクーフリーンは言った。

「途中で拾ったり、シャドウサーヴァントの残骸として出てきた虹色の石があるだろ？アレが触媒代わりになる。幸い、ここらには召喚が何回かは出来るくらいには魔力が満ちてるから、召喚用の魔方陣：は嬢ちゃんの盾でいいか。それに石を3個か、まあ不安なら4個ぐらい捧げりや、簡潔ではあるが英霊召喚は出来るだろうぜ」

そう言ってから、ただしとクーフリーンは念押しした。

「知ってるだろうが、英霊召喚は肝心のサーヴァントが出てくる可能性が低い。何も出てこないならいい方で、下手すりゃ見境無しに暴れるバケモンが出てくるって可能性もある。」

それに、あの石は触媒にはなるが、どんなサーヴァントとも所縁がない。どんなヤツが出てくるか分からないってこつた。せつかくサーヴァントを召喚出来ても、命令を聞かない傲慢な野郎が出てくるかもしれない。その上でも、召喚出来なきゃまず負け戦だ」

さあ、どうする？

そんな責任を問う言葉に、返答を悩むことは無かった。召喚をしよう。

いいのかと聞かれても、気持ちが変わらなかつた。どうせ何もしなかつたらオシマイなら、足掻くだけ足掻きたい。

ふと、マシユの方を見る。マシユは不安そうにこちらを見返していたが、その眼は先輩を信じますと言っていた、と思う。

そう言うと、クーフリーンは目を丸くしたかと思つたら、突然大笑いし始めて、バンバンと背中を叩いてきた。手加減されているにしてもサーヴァントの怪力で叩かれて痛い思いをしていると、クーフリーンは笑いながら言った。

「いや〜お前、てつきり日和るか自棄になるかと思つてたが、いい具合に吹っ切れたじゃねえか！さつきは脅すような言い方をしたが、安心しとけ。もしバケモンが出てきても速攻で捻じ伏せるし、傲慢な野郎が出てきても無理矢理黙らせて言うことを聞かせてやる。もし何にも出てこなかつたとしたら、その時は潔く玉砕しようじゃねえか！」

玉砕という言葉に少し空気が微妙になりながらも、クーフリーンの言い分でやる気を取り戻せた俺たちは、早速英霊召喚の準備を始めた。クーフリーンはマシユに盾を置く場所や置き方を指示している。意味があるのかとちよつと不思議になったが、あるらしい。所長は詠唱文をメモ書きしてくれている。よく覚えてるなあと思つたが、魔術師なら当然らしい。

肝心の俺は、集中をしておいてほしいと言われた。召喚の際に強く助けを求める事で、サーヴァントが召喚出来る可能性が上がる、かもしれないらしい。眉唾臭いなあと思いながらも、藁にもすがる思いで集中していると、所長が声をかけてきた。

「はいこれ、詠唱の呪文。読み間違えないでね」

つつけんどんな態度で渡されたメモには、丁寧で読みやすい日本語が書かれていて、しかも読み仮名まで振られていた。いい人だなあと温かい眼差しを向けたら軽くキレられた。やっぱり理不尽だ。

「おーい、魔法陣が描けたぞー！早く召喚しようぜー！」

クーフーリンがこつちに呼びかけてくる。その声に応えて、俺は魔法陣の前に立ち、詠唱を始めた。

「誓いを此処に」

とまあ、そんな事があつたのだ。既に3回詠唱を行い、その結果英霊は顕れなかった。だが、この場にいる誰も、最後の一回まで諦めるつもりは無かった。

この召喚にこの場にいる皆の命運がかかっていて、俺はその全てを背負っている。そうである以上、俺が諦めるのは絶対にダメなんだ。英霊召喚が奇跡なら、俺は今、その奇跡を起こさなければならぬのだ。

「汝三大の言霊を纏う七天

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

だから、どうかお願いします。誰でもいいんです。助けてください。お礼に出来ることがあるなら何でもします。皆を助けられる力を、俺に貸してください！

瞬間、魔法陣から光が溢れ出た。魔法陣を中心に強く風が巻き起さり、立っているのもやつとな状態だ。

『これは…来たぞー！英霊だ！』

通信機からロマンの声が響いてくるが、それに反応をしている余裕がない。光は段々と束ねられ、3つの輪へと収束していき、風も徐々に収まっていく。その神々しい光景に目を惹かれながら、魔法陣の上に、誰かが降り立ったのがぼんやりと見た。

その時、俺はふと、パチパチと焚ける火の匂いのほかに、清々しい…そう、新緑の匂いを感じた。

やがて、召喚の余波は完全に収まり、俺たちは顕れたサーヴァントを視認した。

——そこに立っていたのは、緑色の少女だった。

何を言っているんだと思うかもしれないが、ほぼ緑一色の服に身を包み、肩に付かない程の髪も、柔らかな光を湛えた眼も緑色に統一されている彼女の容姿を言葉にするには、これ以上の表現は無いように思えた。

背は低く、俺の胸ほどもないだろう背丈は、頭に被るやつぱり緑色の大きな帽子のせいか、尚更低く感じた。

その少女はこちらを目に留めると、爽やかな笑顔を浮かべて、元気にこう言った。

「召喚に応じ参上しました。貴方が私のって熱っ!?!火!?!火の海の中!?!」

あ、こりやダメだ。言葉は無くとも、俺たちの気持ちは一致した。

やけど

「召喚に応じ参上しました。貴方が私のって熱っ!?火!?火の海の中!?」

カルデア一同は凍りついた。戦力増強のための英霊召喚で、まさかの年端も行かない少女が顕れ、かと思えば火にガチビビリしたからだ。

女性だからと言って戦力にならないと考えているわけではない。マシユは強いし、さつき出会ったシャドウ・サーヴァントのうちの一体に、女性が混じっていたからだ。

そのシャドウ・サーヴァントは、立香たちが初めて出会った敵の英霊でもあり、クローリンが横入りに助けてくれていなかったら敗北していただろう強敵でもあった。

だが、彼女は“大人”だった。背はスラリと高く、細い腕からは想像出来ないゴリラめいた腕力による杭の一撃はかなり恐ろしいものだった。

それに比べて、目の前の少女は若い。というか幼い。マシユはあのシャドウ・サーヴァントよりも若い。多分俺と年代代だと思う。だが、少女はそれ以上に幼かった。

言っちゃなんだけど、10歳前後の容姿と未だに慌てふためいている様子からは、とてもじゃないけど強そうな印象は抱き難い。腕というか、全体的に華奢だし。

「ちよつとー!いい加減に落ち着きなさい!」

見かねたオルガマリー所長が少女に歩み寄り、肩に両手を置いて声をかける。さつきまで召喚の重圧で顔を青くしていたが、自分より焦っている少女を見て頭が冷えたのか落ち着いている。

恐慌に陥りかけていた少女は肩を触られてピクンとはねたが、所長の方に顔を向けた。

「は、はいー!」

「しっかりしなさい、安全とは言い難いけど、ここまで火が飛んでくることは無いわよ。もう一度やり直しなさい!」

サーヴァント相手によくあんなに強く出られるなあ。そんな風に思っていると、どうにか立ち直ったらしい少女がこちらを向いた。

「わ、分かりましたっ。それでは、改めまして…」

サーヴァント、キャスター。名を瀬笈葉と言います。先ほどはお見苦しいところをお見せしてすみません。こんな私ですが、マスターの助けになれるように頑張ります!」

ペコリと深くお辞儀をしながら、その少女はそう締めくくった。さっきの慌てようとは別人に思える落ち着きっぷりに驚かされたが、それでもやっぱり強そうには見えない。先行きを不安に思っていると、所長が今度はこちらに声をかけてきた。

「藤丸! あなたが召喚したサーヴァントでしょう! 早く契約してステータスを見なさい!」

その声にハッとさせられる。そういえば、サーヴァントは召喚しただけではダメで、契約しないといけないのだ。そうしないと現界を維持出来ず、わずかな時間で消滅してしまうらしい。

そして、契約をしたサーヴァントは能力が見られるのだ。早く契約をしないと、せつかく召喚出来たのが無意味になってしまう。慌てて少女:葉のもとに走る。

「えっと、葉、さん。いきなり呼び出しておいて不躰だけど、俺と契約してもらいたい、です」

少女の容姿からは、とても強大な英霊という認識を持ってないせいできこちなくなってしまう。年下にしか見えないのに敬語を使ってるのも変な感じだ。そんな様子がおかしかったのか、葉はくすりと笑った。

「葉でいいですよ。こちらこそ、よろしくお願いしますね」

その言葉と共に、何かで繋がる感覚がひとつ増える。それと同時に、葉のステータスが見えてくる。

真名	瀬笈葉	クラス	キャスター	出典	東方求聞史記				
(東方自然癒)	属性	秩序・善	地域	幻想郷	筋力	C			
耐久	D++	敏捷	B	魔力	A+	幸運	D	宝具	

：

スキルや宝具まで見たが、正直、ステータスの見方は分からないので、所長に見たままを伝えた。内容を聞いた所長はロマンと顔を突き合わせ、難しそうな顔をして話し合っていた。

「魔力が優れているけど、厳しいわね…火を怖がっていた理由も分かったわ」

『植物の力を借りられる能力、ですか。普通なら有用なんですけどね。いかんせん火の海の中です、使いようが無いのが惜しい』

「宝具も攻撃より補助に寄っているし、Cランクではアーサー王には効果は無さそうね。それ以前に、既にいるキャスターが召喚されるのが想定外すぎて…」

『想定外と言えば、彼女、幻想郷の住人なんですね。まさか実在していたとは…それはともかく、後衛二人に、防御役が一人ですからね。前衛が召喚されるのが望ましかったのが本音です』

「つ…それでも、もう召喚のためのリソースはありません。頭数で言えば、サーヴァントが3体。勝ちの目は十分にあるはずよ」

『…無事の帰還を祈っています』

会話が終わったのか、所長がこつちに戻ってきた。手持無沙汰になり、顔合わせを済ませていたサーヴァント一同も集まってくる。

「お待たせしました。まずは藤丸。よく英霊召喚を成功させませした。この土壇場で戦力をひとつ増やせたのはとても良い仕事です。ですが、相手は強大な力を持つアーサー王です。サーヴァントが一体増えたとしても、油断出来る相手ではありません。なので…クーフリーン」

「あいよ」

「あなたがアーサー王について知っている事を、全て話してもらいます。その上で、如何にかの騎士王を打倒するか。作戦を練る必要があります。いいですね？」

「ああ、全部話してやるさ。にしても、どういう風の吹き回しだ？」

クーフリーンの問いに所長は硬直したが、すぐに何でも無いように

問い返した。

「…何がでしょう」

「その態度だよ。お前さん、そんな殊勝じゃなかったよな？正直言つて別人みたいで気持ち悪いぞ」

「だ、誰が気持ち悪いですって!?!私は私なりにねえ!」

突拍子も無く煽られてキレた所長だが、その様をみてクーパーリンは笑った。

「そうそう、そんな感じだ。あんまり肩肘張らないほうがいいぜ？頭空っぽにしろたあ言わねえがよ、緊張しすぎたって良い事はないからな？」

「わ、分かってるわ！それに、態度を改めたのは緊張のせいじゃないわよ！私は私なりに、功績を認めようと思って…な、何見てるのよ」「いえ別に」

所長の態度が軟化したのを見て、つい嬉しくなってしまった。顔のニヤケを何とかして抑えるのに、今は精一杯だった。

手際

ソレは、焼け朽ちた森の跡地から、街の中に輝いた金色の光輪を見ていた。

幼子の姿をした己が主を守る。異常なモノへ変貌した聖杯戦争から敗れ脱落し、聖杯の泥に霊基を侵されて。それでも尚、その強き意思は滲まず、影を主が拠点とした城を潜ませる森の中に陣取らせた。

影は、その光が英霊召喚によるものだど理解した。

英霊。即ち、敵。

「■■■■■■■■■■ー！！」

岩の剣を固く握りしめ、獣と紛う雄叫びをあげる。すぐさま排除に向かおうとしたが、戦力が分からない以上、待ち構えるのが最善だと、正気を失おうと損なわれなかった数多の戦闘経験が囁く。

「■■■■■■■■■■」

無論、狂化の鎖に縛られ、その上で理性無き獣に墮とされた影に、その囁きは届かない。しかし、辛うじて片隅に残った思考は、獣をほんの少し慎重にさせた。

あくまで様子見。敵勢を観察し、少しでも主の拠点へ向かう素振りを見せれば強襲する。最終的にそう結論付けた獣は、四肢に力を込めた。

地面が陥没する程の踏み込みから、全力の跳躍。さながら翼が生えたかの如く、獣は森を飛び立った。

焼け原を去っていく、その黒い巨人の後ろ姿を見たのは、とうに大部分が焼け落ち、表皮が剥がれ落ちた痛々しい姿の木々だけだった。

淡々と、騎士王アーサー：いや、騎士王アルトリアの能力を語っていくクーフリーン。まさか女性とは思っていなかったけど、そんな事に反応して時間を無駄にしてられない。

ロマンや所長と違って、質問が出来る知識なんて無いから黙ってはいるけど、これから自分たちが挑まなければならない相手が、どれだ

け強い力を持っているのかは十分すぎるくらいに理解させられた。

ふと、流れるような語りに区切りが付いた。立香は語り終わったのかと期待してクーフリーンの顔を見てみたが、その表情に浮かぶ緊張は、さつきまでとは比べ物にならないくらいに強くなっていた。それを見て、立香はここからが本題なんだと気を引き締めた。

「さて、ここまで長々と語ってきたが、はつきり言っただけ全部前座だと思っただけだ。いざ本番！って時に意識しとくべきものは、今から言う二つだけだ」

クーフリーンはそう言うと、ピースサインのように指を二つ突き出し、直後にその内の中指を曲げた。

「二つ目は魔力放出だ。ヤツの得意技で、必殺技とも言っただけだ。普通は魔力を肉体や武器に纏わせて強度を上げるだけだ。だが、ヤツが使うのは特別製で、魔力をジェットみてえに勢いよく噴射させて、それを維持出来るのが、ヤツの最大の強みだ。オマケに、噴射の勢いで動けるから機動力まで高い。多少離れていても油断するなよ。目視出来る距離なら、ヤツは一息の間に飛び込めるからな」

まくしたてるように喋った後、一息つくためか暫し黙り込む。その間に俺達の顔を一人ずつ見たのは、質問がないか暗に確認しているんだろう。誰も質問がないと判断してから、クーフリーンは二つ目の能力について語り始めた。

「二つ目は…察しはついてるだろうが、ヤツの宝具、聖剣だ。宝具がサーヴァントの一番の強みなのは分かっているとと思うが、ヤツの聖剣はその中でも別格だ」

聖剣。これは俺でも分かる。エクスカリバーだ。でも、別格というのがいまいち想像出来ない。

葉の宝具はまだ見てないから分からないけど、クーフリーンの宝具は、召喚した燃える巨大な藁人形に敵を閉じ込めて焼き尽くすとかいうかなりえげつないものだし、マシユの宝具は真名も分かっていないのに、そんなクーフリーンの宝具を受け切った凄惨な防御だ。それよりもずっと凄惨になると、ちよつと想像がつかない。

そんな事を考えていたら、疑問が顔に出ていたようで、軽く笑いな

がら聖剣…エクスカリバーがどんな宝具なのかを教えてください。

「簡単に言うとな、聖剣はビームだ」

え？

「それもただのビームじゃねえ、食らえば大体のヤツが耐えきれないような超威力の必殺ビームだ」

ランサーの俺の槍もすげえ宝具なんだけどな。そんなクーフリーンのぼやきはあまり耳に入らなかつた。だって、剣からビームだ。そんなのめちやくちやかっこいいじゃないか。敵だと言うのに、騎士王が急にヒーロー番組の主役のように思えてしまった。いけないいけない。頬をペシペシと叩き、気を引き締め直す。

「間違いなく、ヤツは開幕に聖剣をブツパなしてくる。まあ、嬢ちゃん
の宝具は多分ヤツの聖剣と相性がいい。踏ん張ればギリギリ耐えられるはずだ。頼りにしてるぜ？」

「は、はいっ…マシユ・キリエライト、全力で皆さんを守ります！」

クーフリーンの言葉に、マシユは気迫を込めて力強く返事をした。カルデアの何処となく薄やかだつたマシユとは別人に見えたけど、その足は震えていた。気持ち分かる。大役を任されて、緊張しないはずがない。それでも、マシユは確かにやれるって言ったんだ。

所長をまねたわけじゃないけど、マシユの肩に手を置いた。長台詞が咄嗟に思いつかなかつたので、ただ一言だけ。

「信じてる」

言葉と一緒に、親指をグツと立ててみたり。やってから気恥ずかしくなつたけど、震えが止まり、少しは気負いを緩められたように見えただから、効果はあつたと思う。所長が色々な感情が混ざつていそうな顔で見えていたけど、見られている事に気付いたのか、大袈裟に咳をしてから、クーフリーンに問いかけた。

「情報は以上ですね？では、打倒騎士王の作戦を『エネミーだ！この微弱な反応はガイコツだろう！数は五体！』」

所長は最後まで言葉を続けられなかつた。所長の言葉に割り込むように、ロマンが敵の襲来を警告したからだ。

同時に、一同の表情が変わる。ガイコツは道中で何度も倒している

雑魚敵のような連中だが、魔力を宿している彼らは、確かに英霊に手傷を負わせられる存在なのだ。それに、一般人たる立香からすれば、たかがガイコツとはとても言えないのが本音である。

事実、マシユと合流する直前まで殺されかけていた相手な訳だから、立香からすればガイコツは油断ならない相手に間違いはなかった。

「作戦会議は後回しだな、まずはあいづらを「すいません!」…あん?」
戦闘態勢に入ろうとしていたクーフリーンだが、呼び止める声に動きを止め、声の主の方を見る。釣られて彼の視線先に目をやると、そこには葉が立っていた。

「ここは私に任せてもらえませんか?」

その言葉に、驕りや油断は感じられなかった。ガイコツは数だけならこちらの戦力より多いけど、英霊なら大して苦戦もしない相手だ。任せる事に不安はないけど、いきなりそんな事を言い出す理由が気になった。

「召喚されてから今まで、一度も戦ってないせいで、私の能力を見せられてないんです。これから決戦なのに、何が出来るかちゃんと分からないのは困りそうだなって」

返ってきた返事に、そういえばそうだと気付く。この場にいるサーヴァントの中で、戦っているところを見ていないのは葉だけだ。スキルは見られるけど、実際にどう戦うのかはそれだけでは分からない。

マシユに盾術とか殴打術なんてスキルは無いし、クーフリーンはルーン魔術のスキルがあるけど、主に炎を使って戦うのは実戦を見ていないと分からなかったと思う。

でも、俺一人の判断で決めていいものでも無い。そう思ったけど、皆も異論はないらしく、特に葉を止めたりはしなかった。クーフリーンなんかはいいぞやれと囁し立ててるし。

「ちよつとでも危ないと思ったら、すぐに助けに入るからね?」

「はい。それじゃ、行ってきます!」

ロマンが示す方向に歩いていく葉の背中を見送る。一応忠告はしたけど、別に問題はないだろう。さつきも言った通り、ガイコツは雑

魚なのだ。戦えないくらい非力だったら止めただろうけど、補助寄りの能力とはいえ、葉もすっかり戦えるサーヴァントのはずだ。

……いや、炎にビビってたのを思い出すと少し不安だな……と、とにかく葉を信じよう、うん。

話してる間に、ガイコツの群れははつきり目視出来る距離まで近づいてきていた。手にはボロボロの槍や剣や弓を持っている。あっちも俺達を視認したようで、手に持っている武器を振り回してカタカタと音を立てながら不格好に走り出してきた。

「えいー」

葉は、武器らしい色鮮やかな扇子を構えると、突き上げるように扇子を一体のガイコツに向けて振るった。すると、その動作に呼応するようにガイコツの足元が隆起した。

ひび割れたコンクリートを突き抜けて出てきたのは、大きな土の塊だった。先端が鋭く尖っている土塊に足元から押し上げられたガイコツは、何の反応も出来ずに頭蓋ごと大半の骨を砕かれた。

「葉符」虫食い紅葉！」

今度は、懐からカードを取り出し、技名を宣言するように叫んだ。直後、手に持っていたカードが鈍く発光する。それを認める事なくガイコツを指すように扇子を向けると、コンクリートの隙間から現れた茨が、二体のガイコツを拘束する。

脱出しようともがくガイコツの頭に、虫食いで欠けた葉っぱが命中した。葉っぱは見た目とは裏腹に強力だったようで、頭蓋骨に刺さるどころか跡形も無く砕いていた。脳を失っても司令塔の役割を果たしていた頭を失った二体のガイコツは、首から地面に倒れ伏し、二度と起き上がらなかつた。

ここで、ようやくガイコツが攻撃をする。先に倒したガイコツの影にいた弓持ちが矢をつがえ、葉に向けて放った。弓持ちの攻撃は狙いが雑で、大体は明後日の方向に飛んでいくのだが、今回は珍しく真っ直ぐと葉の方に矢が飛んでいった。それを見て、思わず危ないと叫びそうになったが、矢が飛んでからではあまりにも遅い。それに、どの

道忠告は不要だった。

いきなり飛んできた攻撃にも葉は動じず、半歩右に動いて見せる事で矢を回避した。的を失った矢はコンクリートにぶつかり、石の鏃がコツンと寂しい音を立てた。

「月花符」向日葵！」

回避の直後に、葉はさつきとは違うカードを取り出した。叫びと共にカードが鈍く光ると、弓持ちの足元と頭上が輝き、その輝きの中から光の柱が放たれた。光の柱の奔流にガイコツは呑み込まれ、光が消えた時にはチリしか残っていなかった。

「……強い」

あつという間にガイコツを倒して、残るはもう一体だけだ。苦戦も何も無く、終始一方的に圧倒している。

技名らしきものを叫んでいるのは、スペルカードというものだろう。スペルカードについての説明は無かったが、立香にはスペルカードを構える葉の姿が、頭の中で杖を構えるクーフリーンの姿と重なって見えた。葉にとつて、スペルカードが杖なんだろう。何となく、そう思わされた。

「葉符」深緑の温もり！」

葉は油断なく、最後の一体に向けて三枚目のスペルカードを使用した。今までに使用したスペルカードとは違った効果を見せるようで、ガイコツを陽光のような暖かな光が包んだ。その結果、ガイコツは砕けず傷も付かず、むしろ所々に付いていた細かな傷が綺麗さっぱりと消え去り、動きが少し良くなった気がする。

どうしたのかと葉を見てみると、葉にも想定外だったのか、驚いた顔をしているがすぐに切り替え、最初と同じようにガイコツに向けて扇子を振り上げた。動きが良くなったと言ってもサーヴァントからすれば微々たる誤差らしく、結局そのガイコツも、他と同様にその骨を砕かれた。

敵を一掃し、後続がない事を確認した葉は警戒を解き、こちらに戻ってきた。ガイコツ相手とはいえ、何もさせないまま圧倒する実力は流石サーヴァントだと思った。でも、それ以上に気になる事がある

る。

「葉、気になったんだけど、最後に使った技は何？」

多分、アレは攻撃のための技じゃない。スキルにあつた治癒を利用したスペルカードだと思うけど、わざわざそんなものを敵に使つた理由が分からない。色々考えたけど、本人に聞くのが一番だと思い、問い掛ける。一体どんな返事が来るかと思つていたら、真相はかなりしようもなかった。

「えつと……アンデッドは回復に弱いって、現代の知識にあつたんです。あのガイコツもアンデッドに見えたから試してみたんですが、ダメでした……」

文字通り赤裸々になりながらぼそぼそと打ち明ける葉に、俺も他の皆もかける言葉が見当たらなかつた。せめて慰めの言葉をかけようとしたその時、遠くから獣のような叫び声が轟いてきた。

ガイコツとは比喩物にもならない化物が近付いている。その化物がこちらに向かつてきている事を察してしまい、思わず頭を抱えた。

しんがり

耳が割れるような轟音に真っ先に反応したのはクーフリーンだった。直前まで見せていた葉の手際を褒める兄貴肌は消え失せ、緊迫した顔で杖を片手に硬く握りしめて叫んだ。

「おい、今すぐここを離れるぞ！葉は嬢ちゃんを頼む！」

「分かりつ、ましたー！」

「え!?!いきなり何……つてきやあつ!?!」

言うが早いのか、彼は立香を小脇に抱えると、急な事に呆気にとられているマシユの手を引き駆け出した。葉は指示通りにオルガマリーを抱きかかえ、クーフリーンの背中目掛けて飛んだ。

あれよあれよとしている内に抱きかかえられたオルガマリーはしばらく茫然としていたが、頬を打つ乾いた風に正気を取り戻すと、既に横顔が見えるクーフリーンを問い詰めた。

「ちよ、ちよつと！いきなりどうしたのよ！」

「バーサーカーだ！あの野郎、森から出てきやがったんだ！」

返答に顔が青ざめるのを感じた。バーサーカー。黒化したセイバーが最後に打ち破った相手であり、この地で行われていた聖杯戦争において最強を誇るサーヴァントだ。

真名はあのヘラクレス、神からの数多の試練を乗り越えた大英雄だ。残留思念が特異点の魔力と結びついたシャドウサーヴァントに身をやつし、宝具は失われ、ステータスも本来より衰えていながら、なおもクーフリーンをして脅威と言わしめる恐ろしい狂戦士だ。

『刺激しなければ大人しくしてるって話だったよね!?!いきなりどうして!』

「葉の召喚に反応したんだろうな、あいつに警戒されるなんざ名誉だ誇れ！」

「困りますー！」

ロマニの言うように、影化したバーサーカーは己のマスターが拠点としていた城を囲む森から動かずにいた。残留思念に成り果ててもマスターを護ろうとする忠義に驚きながら、戦闘を避けられそうだと

胸をなでおろしていた。

しかし、クーフリーンの言葉通り、葉、即ち新たなサーヴァントの出現に反応したのか、かの影英霊は森を出て脅威の排除をしようとしらに向かってきている。

それを裏付けるように、軽口を叩いている間にも破壊音と地響きは急速に近付いていた。特異点化した冬木市の魔力濃度は葉の故郷である幻想郷並みに高まっており、それに比例して葉の飛行速度もクーフリーンが俊足のルーンを己に刻んでようやく並走出来る程に高くなっていった。

なのにも関わらず、遠くから響いていた地響きは離れていくどころか、今にも一同に肉薄しようとしている。

「戦闘は避けられません！マスター、指示をお願いします！」

「ええつと、ええつ……ど、どうしよう」

指示を仰がれた立香は逡巡する。今からバーサーカーとの戦闘で消耗してしまえば、先に控えているセイバーへの勝ち目は今より細くなってしまっだろう。それでもマシユの言う通り戦闘は避けられない。決断をするには、時間も経験も、何もかもが今の彼には足りていなかった。

「マスターさん……。……よし」

葉は立香の悩む様を見て腹積もりを決めた。もとはと言えば自分が召喚されたせいで撒かれた種だ。ならば自分で解決するのが当然の事だろう。

何より、立香とオルガマリーは今を生きている。マシユは半人半英霊、半分でも同じように生き続けている。クーフリーンには自分と違って決定打がある、セイバーとの戦いには欠かせない存在だ。

クーフリーンの顔を見た。視線に気付いたクーフリーンは葉と目を合わせると、意図を察したのか苦悶の表情を浮かべたが、直後には吹っ切ってみせて頷いた。

「なに、何よ？何通じ合ってるの？バーサーカーを何とかする作戦でも思いついたの？」

「はい。……マシユさん、所長さんをお願いします」

「え？は、はい。葉さんはどうするんですか？」

オルガマリーを託されたマシユの問いに、葉は微笑みで応えた。急な笑顔にマシユは困惑しながら、何か考えがあるんだろうと自己解決したが、彼女にしがみつくとオルガマリーは気付いてしまった。

見覚えがあつたからだ。封印指定を下され、逃亡の果てに愚かにも時計塔に齒向かい散つた魔術師と同じ顔。

それは、死兵の顔だ。

「葉、あなたまさかっ……」

「……これが一番なんです」

「っ!?そんな」

オルガマリーの問いかけに葉はぎくりと肩を跳ね上げ、微笑みを苦笑に変えた。そこまで来れば、立香やマシユにも葉の心積もりは伝わってしまった。

葉は残ろうとしている。たった一人で、バーサーカーを押し留めようとしているのだ。あまりに無謀だ。一人では打倒するどころか、猛追を振り切り逃げ切る事すら困難だろう。その末路は想像に難くない。

止めなければならぬ。しかし、止めようとして言葉を詰まらせた。

マシユは何も言えなかった。止めないといけないと、なぜ自分がそう思ったかも分からない彼女には、葉を止める言葉を紡げなかった。

オルガマリーは保身がよぎってしまった。葉が自己犠牲を選んだと気付いたとき、頭の片隅に安心感が芽生えてしまった彼女は、何を言う事も出来なくなってしまった。

立香は死の覚悟に気圧された。争いと無縁な人生を送り、今日初めて死の恐怖に触れたばかりの彼は、自ら死に向かおうとする葉の献身を拒めなかった。

各々の理由で葉が受け入れられようとしていた。その中、重い空気を打ち払うように、それまで黙って走っていたクーフリーンが口を開いた。

「かあゝっ、しけた顔でしけた事言いやがる。おい葉、このまままつす

眩い金木犀

既に崩れかかっていた家屋に止めを刺すように壁を突き破ったヘラクレスの黒英霊は、すぐに標的——葉を視界に捉えた。

(っ！)

その瞬間、葉は総毛だった。ただ見据えられただけで、己が成す術もなく狩られる獲物である、と錯覚してしまったのだ。今すぐに逃げ出したくなる自分の弱気に渴を入れ、常人ならば卒倒してしまうような威圧感を前にひるまず、負けずにキツとにらみ返した。

(この人がヘラクレス……お、大きい)

にらみながらも観察する。人というより、大木のようなだった。見上げなければ目も合わせられない巨体は分厚い筋肉に満ち満ちて、片手に握る無骨な岩剣ですら葉の背丈を上回る大きさだった。

しかし、本来なら溢れんばかりの生命力を湛えていただろう肉体は、今は死臭に満ちた瘴気に吞まれて見る影もない。内側から食い荒らされてしまった大樹。それがかの黒英霊に抱く印象だった。

(……強い)

だが、虫食いでも未だ芯まで枯れてはいない。狂気に囚われた眼光はしかし曇り切らず、濁りのない純粹な意志——殺意を葉にぶつけている。元よりバーサーカーとして召喚され、今はその残滓しか残っていないというのに、彼が放つ圧は紛れのない本物だった。

ほんの少しの睨み合い。束の間の静寂を切り裂いたのはヘラクレスだった。息を大きく吸い込み、目に見える程に肺を膨らませる。葉はそれと同時に身構えた。何を仕掛けてくるか、すぐに理解したからだ。

そしてヘラクレスは葉の予想通り、溜め込んだ空気を一気に吐き出すように咆えた。

「■■■■■■■■■■———！！」

思わず耳を塞ぎたくなるような音の爆発に、身構えていても身体が強張るのを感じる。冷たく乾いた空気は轟きに呼応するように震え、

家屋の残骸にちりちりと燻る火種は、叫びとともにごうと鳴く風にはためいた。

咆哮の余韻が消えるのを待たず、ヘラクレスは前傾に構え、飛び出した。巨体に見合わない豪速で標的の命を奪わんと迫る筋肉の凶弾は、呆然と立ち尽くす敵が間合いに収まるのを本能で悟るが早いのか、手に握る身の丈ほどの石剣を力任せに振り下ろした。

刹那、世界が弾けた。

雷が落ちたかのような轟音とともに、衝撃に耐えきれなかったコンクリートは砕け散り、その直後には砂煙と化して辺りに立ち込める。まともに喰らえば耐久に優れた英霊でも痛手となるような豪快な一撃。しかし、その下手人であるヘラクレスは矢継ぎ早に二の太刀を振るった。

「やっぱり、ですよね！」

横薙ぎの一振りによつて裂かれた土煙は、初撃をやり過ぎ、砂煙の煙幕に紛れ距離を取ろうとしていた葉の姿を曝け出した。

狂気の鎖に囚われ、主を失い敗れ去り、残滓に堕ちたといえど大英雄。膂力に任せれた粗雑な大振りしか出来ずとも、手ごたえのない攻撃で獲物を仕留めたと見誤る事はせず、一度捉えた獲物は逃がさないと言わんばかりに追撃を仕掛けていく。

「わっ、危ないですね！」

一方の葉は、急襲に意表を突かれたものの、砂煙に紛れた数瞬の内になんとか態勢を整えていた。かすつた風圧に絶対に食らつてはいけない気負いを抱きそうになるものの、初撃さえ凌げれば、バーサーカーの攻撃は容易いものだった。確かに一発一発を全力で振りかぶる攻撃は、当たってしまえば一たまりもないだろう。

だが、どれだけ強力な攻撃も当たらなければ意味がない。一発一発が必殺技と言えば聞こえはいいが、大技を当てるための小技がない。乱暴に振り回される武器や手足の全てが必殺の威力を持つのは恐ろしいが、どこに飛んでくるのか分かつている攻撃なら、体力の限りか

わし続けられる自信が葉にはあった。

「はあっ！」

だが、避けてばかりではきりが無い。叩きつけを横跳びにかわしながら、手をかぎして反撃の弾幕を放っていく。飾り気のないシンブルな光弾が、体を激しく振り回すヘラクレスの横っ面に幾度も直撃していく。一発一発が骸骨兵の骨を砕く威力を宿す光弾を数多に受けていながら、ヘラクレスの暴威はまるで留まることを知らなかった。

「■■■■!!」

掴みかかろうと伸ばされた剛腕から間一髪逃れる。捕まってしまうえば紙鉄砲のように散々に振り回された拳句、人型のぼろきれに早変わりだ。想像に冷や汗を垂らしながらも扇を振るうと、扇がれた風が植物の力を纏い、緑色のオーラとなつて放たれる。続けざまに二回振るわれたオーラがヘラクレスを貫くが、まるで効いた様子を見せず攻めの手を緩めない。

「まだまだ！・月花符『—金木犀—』！」

懐から取り出した符を切ると、葉の背後に植物のエネルギーで出来た槍が現れる。衝撃波を纏いながら立て続けに飛来していく槍は、ヘラクレスを中心に交差を描きながら次々に命中していく。その間にも仕掛けられる猛攻を凌ぎながら、手元に生成した一回り大きな槍を握りしめると、そのまま振りかぶり交差を貫くように投擲した。

ヘラクレスの鋼のような腹筋に大槍が突き刺さり、既に刺さっていた二つの槍諸共炸裂する。妖しい閃光を放ちながら霧散していく破片に目を眩ませる暇も与えず、二の矢三の矢を放っていく。

「ええいー！」

最後の一撃を放ち、一際強い閃光がヘラクレスを覆う。スペルカードを用いた攻撃は、通常の弾幕とは比べ物にならない威力を有する。キヤスターとして召喚された彼女は、最大火力こそ別クラスに劣る分、最も治癒に長けている。

だが、それだけではない。

「■■■■——」

閃光から解き放たれたヘラクレスは、先ほどまでの勢いが嘘のよう

に動きの精彩を欠いていた。その様子を見た葉は、自身の試みが成功したことに安堵する。

金木犀は小ぶりの花を咲かせる慎ましい印象に反し、香水に使われるほどの強い芳香を発する。その香りに酔いしれる人がいたことから、謙虚や謙遜の他に、陶酔という花言葉が付けられている。

葉の放ったスペルカード『金木犀』は後者の花言葉をベースにした弾幕で、人を惹きつける芳香を炸裂時の閃光で再現しようというコンセプトで作られた。妖しく輝く閃光は見る者を徐々に酔いしらせ、やがてはその視界に虚像を映し出し、あるいは実像を奪い去る。

元より狂っているバーサーカーであるヘラクレスに通用するかは半ば賭けだったが、むしろ狂気の鎖が呼び水となってより強い効果をもたらしてくれた。防御をするだけの思考回路が損なわれているせいで、全弾をもらに食らっていたのも大きい。

このような機転は、彼女がキャスターのクラスであるから出来るものだった。それ以外のクラスの場合、勝利のための工夫などは出来ても、最終的な着地点が魔砲ぶっ放しのような力押しになる。キャスターのクラスではそれが出来ない分、搦め手などに頭が回るのであった。

(幻覚はともかく、攻撃はまるで効いてない……それなら)

そして、幻覚が通用した時点で、どう戦闘を終了させるかの算段も既に付けていた。幻覚は強力なバッドステータスだが永久に続くわけではないし、二度は耐性がついてかかりづらくなってしまふ。一度きりのチャンスを逃すまいと、葉は次の手札を文字通り切った。